

野殿・童仙房地域における協働的な「学びの空間」をめぐるフィールドワーク
Fieldwork for the Collaborative
“Learning Space” in Nodono-Dosenbo Area

研究代表者 児玉 華奈 (D1)

教員 前平 泰志

研究分担者 太田 拓紀 (D3) 辻 喜代司 (M1) 生駒 佳也 (M1)

〔研究目的〕

野殿・童仙房地域は、京都府最南端南山城村にある二つの区である。奈良県、三重県、滋賀県に隣接しているが、最寄り的大河原駅から急勾配の坂を車で15分ほど上った高原地帯にあるため、独自の地域的特徴を形成している。人口は、野殿区が100名、童仙房区が245名(平成19年3月時点)であり、茶業を中心とする農村地域である。野殿は明治以前から伝統的村落を形成し、一方、童仙房は明治に入って開拓された新しい村落であり、対称をなしている。

ここでは一部の地区住民たちが中心となって、京都大学大学院教育学研究科の生涯教育学講座、教育実践コラボレーション・センターと連携し、閉校した旧野殿童仙房小学校を活動拠点に「新しい生涯学習空間」づくりが始まっている。地域との協働をめざすためには、野殿・童仙房地域の歴史や文化、社会関係を理解し、生涯学習空間づくりの基礎的な知識を蓄積する必要がある。

そこで本研究では、地域住民の意識や教育観、さらには地域の歴史的形成過程や民俗に焦点をあて、これらを明らかにするとともに両地域の特性も理解したいと考えている。この作業を通じて、京都大学が住民と協働で取り組む「学びの空間」づくりの基礎資料としたい。

〔研究経過〕

研究代表及び研究分担者は、野殿童仙房生涯学習推進委員会(大学と地域住民で構成)が主催する「風と雲の広場」や収穫祭、また地区行事である秋祭りなどにも参加し、地域住民とのふれ合いや、地区の概要を把握した上で、各研究分担をもとに、のべ19回の聞き取りや資料調査を行った。

児玉は、京都大学とパートナーシップを結ぶにおいて、中心的な役割を果たした地区住民の意識や、両地区における今後の活動の可能性などを探究するためにインタビューを中心とした分析を行った。生駒は、童仙房地区の歴史的形成過程を史料をもとに調査し、過去の研究史の中で童仙房の位置づけを調べ、京都大学と連携を選択するに至った経緯を分析した。辻は、野殿地区で伝統的に形成されてきた「寄合」の中の「宮座」に焦点をあて、史料と聞き取りによって、現在に至る過程を明らかにし、伝承形態と現在の機能について考察した。太田は、童仙房地区に多いＩターン移住者に注目し、インタビュー調査をもとに、多様な来歴を背景に地域活性化の営みに参加する意識を分析し、今後の地域再生の可能性を考察した。

〔研究成果〕

児玉は、京都大学と野殿・童仙房地区住民が会うことで生じた変化を、地区住民側の意見から取り出し、そこから「協働」や「学び」と表象化される実態を解明するための作業準備を行った。このことは、もう一方で、野殿童仙房地区を「フィールド」として規定してきた京都大学側の意見や意識変化と照合する中で、新たに「生涯学習」の意味を問う契機となると考えられる。

生駒は、童仙房の歴史的形成過程と研究史の整理を通じて、野殿童仙房生涯学習推進委員会が設けられるに至った経緯の内在的要因を探ろうとした。しかし、このことは、近代日本が必要とした内的フロンティアとしての「開拓」が、近代以前をどのように「消化」し、また近代をどう「創出」する必要に迫られたのか、さらには外的フロンティアとしての「植民」とどのような関係にあったのかを考える課題を残した。

辻は、童仙房とは対照的な野殿の「寄合」を取り上げることで、伝統を継承することにある現在の意味を探ろうとした。このために「宮座」を対象とし、村落形態の変化に応じた継承のあり方を、事実に基づき記録分析した。ここからは、集落が単に人の集合体としてもつ集積効果を越えて、集落自体としてどう存在しようとしているのかという現代的な課題を提起することにつながった。

太田は、童仙房地区の住民の中でもＩターン移住者に焦点化し、地域活性化に向けられる彼ら彼女らの熱意を意識形成の側面から分析した。そこには「教育」が媒介する地域像が重なり合い、それが「生涯学習」に対する期待にまでつながっている現実を描き出した。またこのことが「語られる歴史」と結びつき、村のあり方も規定していることも解明した。

以上の研究によって、京都大学と野殿・童仙房地区の結びつきを多角的に考察する基盤が蓄積されたと考える。今後は、これらの研究成果を踏まえ、さらに幅広い研究と実践を積み重ね、地域と大学とが「協働」によって、新たな「開拓」を行っていく必要があると考える。

(文責：生駒 佳也)